

息子はやっぱり エイリアン

山本みゆき

男の子の母親となって一年余り。「大変だ、大変だ。」
と言ってばかりいたように思います。でも、その中で、
あまり面白いので、誰かに話したいこともたくさんあり
ました。言いたいことをためておくのは、腹ふくるわ
ざなので、この場をかりて、おしゃべりしたいと思いま
す。

☆いつでも初の連続

子どもを映すためにビデオを買うなんて、と内心思っ
ていたのに、生まれてみたら、何のためらいもなく買っ
てしまった。何という親バカ！ でも、すぐに変わって
いってしまうだろう子どもの今の姿を記すのは、楽し
い。大人が何年も生きた分くらい決定的な瞬間が、一
日の中にあるのだから。それというのも、本当に子ども

は生活していくことそのものが、初めて出会うことの連続なのだ。初めて立った、歩いたは言うまでもなく、初めて目で追った、初めてカタカタの方向を変えた。初めてふざけた、初めてフォークをしようとした……等々。

あーこれはすごい進歩、と思っても、あまり些細であまり数多いため、忙しさにまぎれて書きとめずにおいて次の日になると、さあ何だったかわからない。息子はすずしい顔で、そのことはずっとできていたことのようにやっている。このようにして九割九分くらいは消えていってしまうのである。興味の対象も次々と変わる。三か月の頃好きだった「紙のクシャクシャという音」のメモが、はるか昔のことのように思える。おもちゃ箱の底に歯ブラシやビンのふたがあると、これに凝っていた時間もあつたなあと既に懐しい。今の知(息子・知生)は、もう全然違う方向を向いているのである。

☆くちやくち

八か月くらいの頃から、小さい粒の集まったものを見

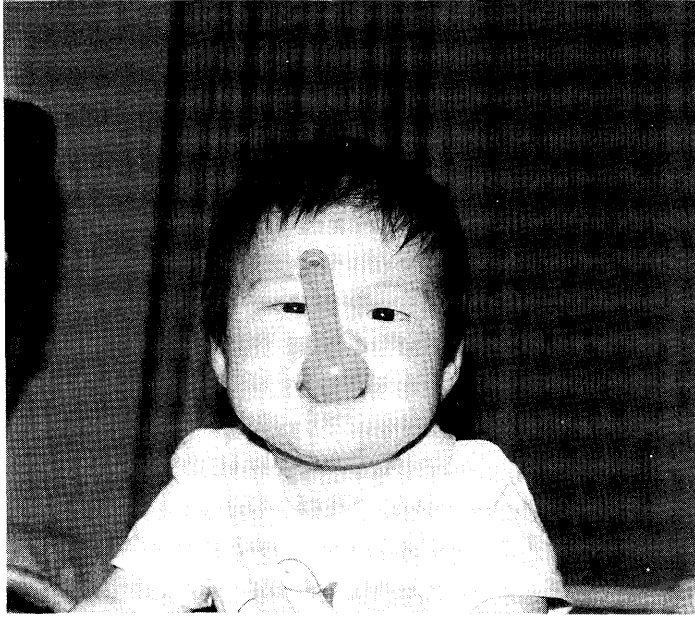
つけると、両手をピアノを弾くような形で揃えてくちやくちやとやるようになった。例えば柿の種。大人が食べているのを見つけると、さーっと這ってきて、菓子器に両手をつっこんでくちやくちや。あつという間に汗ばんだ両手は柿の種だらけ。また、例えば砂利。じーっと地面を見つめていたかと思うと、いきなり手を伸ばしてくちやくちや。あげくのはては、おもむろに一こ味見。

しかし、くちやくちやとやりたくなるのには、ある決まった量があるらしく、あられのようなものでも、少しなら何事もなく食べているのだが、たくさんになると、両手でくちやくちや、ということになる。知の頭の中で、理解できる量を越えると、頭の回路が違う部分とながってしまうのだろうか。以前、両手の指の数“十”以上の数は、数として存在せず、すべて「たくさん」になつてしまう部族があると聞いたことがあるが、赤んぼうも似たところがあるのかもしれない。

☆似てる

◀ 何を思ったか、突然スプーンをくわえて

「プププ」。



知が身近にいるようになってから様々な絵や文学その他の作品の中の子どもの描写のほんの些細な部分に、「これわかる、わかる。」と頷くことが増えてきた。古いところでは、鯉にまたがって滝のぼりをする金時さんの図。あの金時さんの足が、あんよをする前の、足の甲にも裏にもむっちりとした赤んぼの足にそっくりなのだ。しわの刻まれ方までよく似ている。私は寝た子の足をしげしげと眺めては、いつも感心したものだ。新しいところでは、映画『ネバーエンディングストーリー2』の中に出てくるロックバイター・ジュニアつまり岩喰い巨人の子どもである。出番はほんの少しのだが、ほったの肉のつき方といい、首のなざといい、ずり落ちそうなおむつといい、だだのこね方といい、誰かさんにそっくりだ。こういうのはやはり、よく子どもを知っている人が作るのだろう。知のおかげで作品鑑賞の眼が更に高まったと自負している近頃の私である。

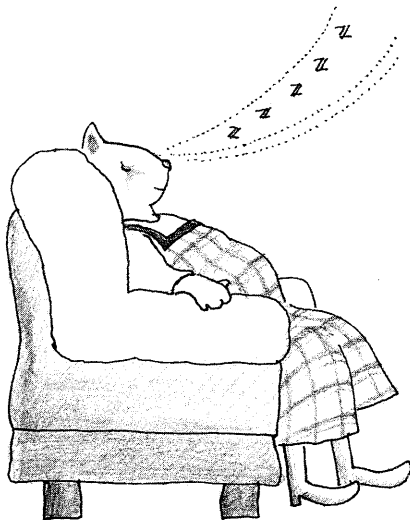
☆知にとつての本

私の勤める幼稚園でも本を踏んで歩く子がいる。内心私はそれだけは許しがたい気持ちだった。私自身、本は友だちのように大切にしてきた（つもり）。その友だちを踏むなんて。

それなのに、知は、本だろうが新聞だろうが平気で踏んづけて、何かを目ざしてどんどこ歩いて行く。時にはまるで、わざと踏んづけて行くみたいによろけたついでに踏んで行く。私の手や足でさえ踏んで行ったことも何回か。とてもこのデリケートな私の子とは思えない。しかし、絵本や写真の本を見るのはとても好きで、見るのもページをめくるのも楽しいらしく、またやってくれと私にせがむ。だが、ある時本を見ていたら、あつという間にビリビリ。「あーっ。」と叫んでしまった私を不思議そうな顔で見る。その時、知にとつて本は楽しむための「本」でもあるけれど、ただの紙にも見えるんだなと妙に感心した。

幼稚園でも、わざわざ編んで作ったあやとりのひもをちょきんと切ったり、自分のくつ下を切ったり、髪の毛

を切ったりと、あつと驚くようなことに遭遇することがあった。その時は、「大切なものを、何てことするの。」と、こんこんとお説教したのだが、今にして思えば、あの子たちはりっぱな四歳や五歳の人たちで、一応は常識というものを持っていらっしやるのだとこちらは思い込



んでいたのだが、時々ねじがゆるんで知と同じ気持ちになることもあったのかもしれない。何だか笑えてきてしまう。今度そういう子がいたら、どうしようか。

☆所々わかっている世界

知にとって、世界は混沌としていて、所々がぱあっと曇り空の晴れ間のようにすっきりわかっているという感じであるようだ。フォークを使って食べたがる人なのに、川底の石も食べてしまう。「バイバーイ」や「こんにちは」ができる人なのに、他の女の人の人をおかあさんと間違えてしっかりと抱っこされたりしている。おとなしくごはんを食べていたかと思ったら、あっという間にお茶の中に箸置きを投げ入れ、焼きソバを手でくちやくちややって、床にまいてしまう。「だめ」「やめて」と言っても、ティッシュやテープをどんどん取り出してしまふ。そういう時の知は、まるで何かに取り憑かれたかのようだ。こういうところが、神の内と言うのかしらとぼんやり考える。一体この人の頭の中はどうなっているのだろ

う……。

しばらく前に『グレムリン』という、かわいい猿のような動物が、飼い方を誤ったためにワルの怪物に変身してしまうという映画があった。当時の解説の「このグレムリンは原子力を象徴しているのであり、使い方次第で味方にも恐しい敵にもなる」ということばにふうんと頷いていたのだが、今の私に言わせれば、こちらが疲れていようが用事があるうがおかまいなしに、夢中になって戸を開けたり閉めたり、ステレオのポリウムを最高にひねって逃げたり、電話のボタンを押しまくったり、ひきだしのものをかき出している知の姿こそが、街の中を次々荒らしていくグレムリンそのものだ。かわいい時、よく気持ちが通じている時は、変身前の姿であり、止めても止めてもその手を振り払ってワルに邁進していく姿は怪物になった、グレムリン・知。この小さい人たちは、まことグレムリンであり、エイリアンであって、人間の姿と似ているからといって、同じ常識の通じる仲間だと思っはいけない。そう思いながらも外出す

る時にはTシャツに吊りズボンに帽子などと、まるで人間であるかのように装わせてすまして出掛ける母ではある。

☆名前の重み

最近の子どもの名前には、親が凝りに凝ったという感じのものが多く、愛濃ちゃん、大我くん。まるで付けた人の思いが自ずとにじみ出てくるようではないか。以前は、こういう名前に出会うと何だか気恥ずかしく、親の思いの重さが感じられるようで嫌だった。

しかし、いざ自分の子の名前を付けてみてなるほどと納得した。「知生」という名をひねり出すために、夫はほとんど一週間、睡眠を削って考え、どうでもいいと思っていた私にしてさえ、幾つか絞った名前のうち、これかと思っていたものが、母が神社で画数をみてもらったら良くないと消されてしまった時、思わず病院から神様に「!?」「どうしてだめなんですか。」などと抗議の電話をしてしまったほどである。うちにしてこれほどの騒

ぎ。やはり重たいはずである。考えてみれば、親としてできることは、名前を付けてやることくらいなのかもしれないのだから。

☆さらわれた知

子どもの育つスピードは並大抵ではない。知も生後一か月で、体重が出生時の約二倍になった。毎日毎日ブクとふくらんでいた感じである、そのためか、毎日することは同じーおむつ・授乳・寝る・泣くーなのに、ある時ふとおっぱいをあげながら（この子は確かに知だけど、私の知っているあの知は、この頃どこに行ったのだろう）と、眠い頭でぼんやり考えている自分に気が付いてはっとした。もうここ一か月余の間に、ちょっと前の知の面影は消え、成長した今の知がここにいたのである。何だか未来を予測するようで、ふっと寂しくなった。昔話にも子どもがさらわれる話があったように覚えているが、こんな気持ちを味わったお母さんが語りだしたのかもしれない。

☆夫の育休宣言

夫は美術の講師として勤めながら、現代美術の作品を作り続けている。その夫が「ぼくは今年は作品を作らない。知と一緒に遊んで過ごす。」と言った時、私はびっくりし、一生懸命ひきとめた。知にとっては嬉しいことだが、せっかく作品を作り続けている上で、ひと夏休むことの損失も大きい。しかし夫は「なぜ出さないんですか。」とのグループ展の仲間からの電話に「子どもと遊ぶから。」なんて平気で答え、「こういう時期も大切。」などと言ってちっとも困った風ではない。もしこれが私なら、私にはとても自信はない。育休でさえ、丸一年休むという思いきりができなくて、知が八か月になった時仕事に戻った。半年余の休みだったのに子育てで充電して復帰なんてとんでもない、育休明けの四月五月は浦島太郎そのもので、ふうふうしていたように思う。大変なことばかり数えていた私と、「今だからかわいいんだ。」と知との生活を大切にする夫。何だか育児休暇の本当の意味を、夫に教わったような思いがする。

おわりに

知のことで、「ああ、これは。」とひらめいて、誰かに言いたくなることは、すべて取るに足らないことばかりです。今回も、整理し、まとめようとしたら、何だか書きたいこととどんだんかけ離れていくようなので、思いついたままの形で書き並べてみました。これらのことは、もしかしたら、その場に居合わせた者だけがわかるような類の面白さなのかもしれませんが、きっと小さな子との生活の中には、こんなできごとや思いが何百もふっとわいて出て、その場を楽しませて消えていってしまうのでしょうか。これからもどんな予期せぬ出来事が起こるのか楽しみに、知と暮らしていきたいと思っています。

(はるにれの会)